

科研費改革が求められる背景・構造

量

研究資金の需要拡大

第4期計画
(実績)
23兆円

第5期計画
(目標)
→ 26兆円
論文生産性の向上

環境の劣化

大学の経営環境

...安定的な収入の減少(特に地方)

個人の研究環境

...カネ・スペース・時間の不足

→ 科研費が「命綱」に

グローバルな研究力競争の激化
(日本の存在感の低下)

科研費へのニーズの著増

※応募件数 年率3.3%増加

負の影響

研究者のリスク回避傾向
短期的・内向き志向
等

科研費改革

量の充実

採択率30%達成+充足率確保

質の向上

- ① 審査システムの見直し
- ② 研究種目・枠組みの見直し
- ③ 柔軟かつ適正な研究費使用の促進

日本の学術研究への現代的要請

挑戦性、総合性、融合性、国際性

→ 分野・国境等のカベを超えた知の融合によるブレークスルーの創出

質

基礎科学力の強化に向けて - 「三つの危機」を乗り越え、科学を文化に - (概要)

(平成29年4月24日 文部科学省 基礎科学力の強化に関するタスクフォース)

【経緯】

- ✓ 基礎科学は、新たな知を創出、蓄積し持続的なイノベーションによる社会経済の発展の源泉となるものであり、その振興が極めて重要であることは論を俟たない
- ✓ 研究者の目線に立って、学術研究・基礎研究の振興や若手研究者支援の強化に向けて、具体的な対応策を検討

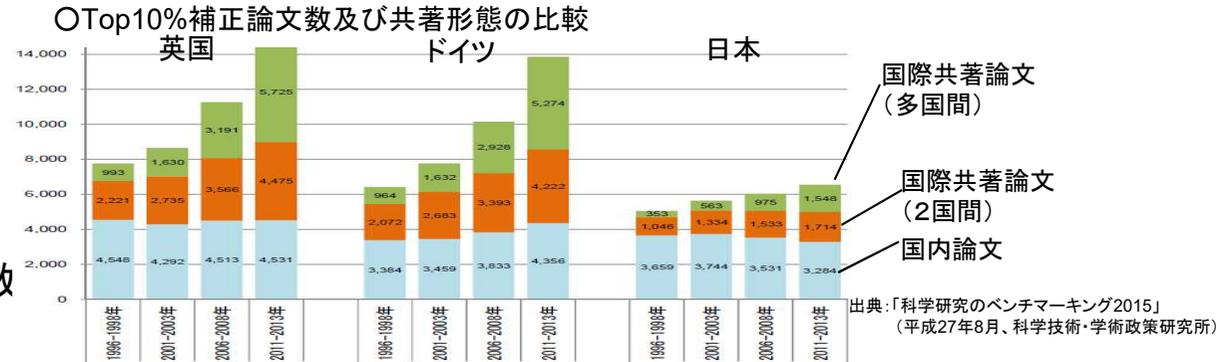
【日本の基礎科学力の揺らぎ - 三つの危機】

○論文数の伸びは停滞し、国際的なシェア・順位は大幅に低下

Top10%補正論文数 日本：4位→10位

Top 1%補正論文数 日本：5位→12位

○新たな学際領域への参画の遅れや、国際共著論文数の割合も小さく、日本の存在感が低下



研究の挑戦性・継続性をめぐる危機

➤ 研究費・研究時間の劣化

- ・基盤的経費や自主的・自立的な研究を支える研究費が減少
- ・長期的な視野に立った独創的な研究への挑戦や自主的・自立的な研究に専念することが困難
- ・研究者の研究時間の減少
- ・競争的資金への依存が高まることによる、研究費の途絶、研究の中断のリスク

次代を担う研究者をめぐる危機

➤ 若手研究者の雇用・研究環境の劣化

- ・若手研究者の雇用が不安定化
- ・研究者が短期の業績づくりや事務作業に追われ、独創性を発揮しづらい
- ・キャリアパスの不透明さ、経済負担などへの不安
- ・優秀な学生が研究者の道を躊躇・断念

「知の集積」をめぐる危機

➤ 研究拠点群の劣化

- ・論文数の伸びは停滞し、国際的なシェア・順位は大幅に低下
- ・世界トップレベルの研究拠点を形成し、研究成果はあがっているが、我が国全体に与える影響は限定的
- ・我が国全体の研究力強化のためには、「知の集積」の場となる研究拠点群の厚みが不十分
- ・基礎科学力の強化に向けて研究情報基盤等の整備・充実が不可欠

【科学は「文化」として根付いているか？】

○研究の価値を、すぐに役に立つか否かで考える価値観が根強く、真理探究の営みそのものに十分な価値を認めるには至っていない

○基礎科学への関心も、日本人研究者のノーベル賞受賞時等の一時的な高まりに止まっている

⇒ 科学を「文化」として位置づけ、日常的な関心の対象とするとともに、社会・国民が基礎科学の発展を支援していく機運の醸成が課題